
2000年度言語研究センター主催 講演会についての報告

西 野 清 治

今年度は、下記の二人の先生に講演をしていただくことができました。無理を言ってお願いしたにもかかわらず、お二人の先生ともこころよくお引き受けくださいました。深く感謝いたします。また、講演会に参加してくださった皆様、大変ありがとうございました。以下に、講演内容を簡単に紹介させていただきます。

第二回目「意味研究への道」

国広 哲弥（神奈川大学名誉教授、東京大学名誉教授）

11月29日(水) 参加者約20名

国広先生は、自分がなぜ言葉の研究・意味の研究の道に進むようになったのかということから始

めて（これは一部の所員から聞きたいという要望があったテーマである）、先生がたどりついた現象素という考え方までを、具体的な例を交えながら、話された。

先生は旧制高校時代に、英語を週に9時間、中国語を3時間学んだという。そのときの英語の先生に教えられた英文解釈の仕方や、中国語の先生が実践していた、返り点を使わない独自の読み方などに強い刺激を受けたという。また、東大時代には、恩師にあたられる服部先生の意味論に強い興味を覚えたという。国広先生は、当時全盛だった構造主義的な考え方をそのまま受け入れることなく、一見多義語に見えるような語の裏側に隠れている1つの核になるようなものを追求したいと考えた。そして、現象素（プロトタイプとはまた違うらしい）と先生が呼ぶものの存在を、独自に

提唱するに至った。これは、いま広く行われている認知意味論に通ずるものである。そして、現象素という考え方に基づいて、いろいろな分析を試みせてくれた：テンス・アスペクトに関しては、日本語の「る」や英語の現在形は「現在」という意味を持たない。それらは単に「未完了」しか表さず、テンスに関しては白紙のような状態であり、テンスが何であるのかを決めるのは他の要素である；「かける」という多義語の意味の分析は、ある対象物に何かを投げつけるというたった1つの現象素を想定し、その投げつけたものが対象物にどの程度到達しているかの度合いによって、いくつもの意味がその現象素から導きだせるというような具合にすることができる、等。その他にも、いろいろ興味ある分析を試みせてくれた。